

雨の湯ノ湖

上野の駅の中には何千人という人々が朝早くからつめかけていた。この二日の休日を目当てに来た人々で、今日明日と続いた都合のいい休日であることを思うと多少は混むのを覚悟して来ていて、それだけに他の日に余裕を持たないのだろうと言うことは、この人々の間に見える何々工場とか何々組合とかの急拵えの旗を見てもよく判ることだった。人々は旗を振つてのび上がったり、仲間を呼び、人の間を掻き分けて叫び合った。その声が高い天井に反響し重なり合い、一緒に交つてわんわんと言う音響となっていた。その喧しきの中では少し遠くなるとう人の顔は見えても叫んだだけでは通じない。そう言う人々が手や旗を高く振るのであった。真ん中にある旅客案内所の接客台はとうに旅客の占領するところとなつて、十五、六人の人々がその台の上に土足で上がり、人々の頭上高く立上つて、入口の方を呆んやりと見ているのは多分見えない仲間を探し待つのだろう、探しあぐみ疲れたのかも知れないが土間の人の群れの喧騒に茫となつていようにも見えた。

春子は、七時三十分に会社の人々とここで集合する約束だった。市電から下りて駅へ駆け込んでみるともう約束より十分も遅れていて狼狽あつてしまった。集合場所は一、二等待合室の前であつたが、一杯の人の群れで丈の低い春子には見えるどころではなかつた。人を押し分けて行くのにも余りに混んでいて、彼女はただ上の方に見えるワンワンと音を反響させている天井と天井から下がった大きな時刻表の板を遙かに遠く眺めて途方に暮れた。人の背の後ろにたたずんでいると、あとから来た大きな体の男達が無遠慮に春子の体を横に押しつけて、よろけながら顔を陰しくして睨む春子には振り返りもせず夢中で尚も押し分けて行き、一人が通ると他の男があとからあとと続いて、そこが道のようになつた。春子の体は人の通る度に肩をこづかれたり背中を押されたりした。

「お、春ちゃん」

大きな長い顔の背の高い住川が人々の間から現れた。春子は救われたように叫んだ。

「住川さん」

「もう、みんなとうに集まって待ってるんだ。向こうだ。僕の後ろについて来給え」

住川の後について行くと、楽に人の間を抜けて行くことが出来た。待合室の前の鉄の柱の蔭になるところに会社の人々がいた。春子が来たのがわかるとみんな顔を明るくして、春子を取り巻き口々に、

「遅いぞ、春ちゃん」

と叫んだ。阿部は電気時計を指して、

「春ちゃん、見なさい。七時四十五分だ。十五分遅れたよ」

「すみません」

「罰に中禅寺湖からリュックサックを背負わすかな」

「御免なさい」

詫びる春子に阿部は上から彼女の黒い大きな眼をのぞき込んで笑った。吉本も言った。「どうしたい、春ちゃん。余り遅いので来ないのかと思った。心配させるぜ」

社長の谷が国民学校へ行っている二人の子供と、母親の老婆をつれて皆の後から顔を出した。

「春さん来たか。それじゃあみんな揃ったな。吉本君。君、切符を買って来てくれないか。日光行、大人二十枚、子供二枚だね」

社長の谷は会社の社員の慰労の意味でもう半年も前からこの旅行を計画し、社員達も毎

日輪転機の唸る狭い暗い場所で、このことばかりを楽しみにして働いて来たのであった。一行は社長の谷、二人の子供、老婆、支配人格の阿部、次席の新田、それから住川、吉本、岐部の他に四人の職工、倉庫番や小使の老人達、給仕の少年、女では安子や滝子すみ子、それから一番若い春子、その他に会社と関係のある工場から上坂と村田を親善の意味で招待した。社員達は谷自身がまだ四十そこそこののでみな若く阿部や新田は三十代、住川や吉本は二十代であった。支配人格の阿部は今日は二、三日前から風邪をひいて参加しようかしないかと迷っていたところだったので、すべて新田に頼みまかせることにした。少しいと言つて出るには出て来たが、春子に笑いかけた顔もすぐ弱弱しく生気のない色になるほどまだ回復していなかった。春子は訊ねた。

「どうですの、御風邪」

「ああ、少しいいようだけどまだ熱がある。昨日から薬をずっと呑んでいるから上がらないのですよ」

住川が傍から春子のバッグを見て、

「春さん、その荷物を僕のリュックサックに入れよう」

「ええ有難う。でもこれは私、持ってきます」

「住川君、日光の方の天気はどう？」

「いいそうです」

「そう、そりゃいい、紅葉が素晴らしいよ、きっと」

「いいわねえ。でもこの人で大変でしょうね」

「混むだらうけど、日光へ行く人々ばかりじゃあないからね」

人の群れが俄かに動き出した。遠くの方でベルが鳴る音がしていた。改札口には駅員が高いところに登ってメガフォンを口に当てて唖れた声でしきりに叫んだ。人々はそれに指図されて二列縦隊になった。

「さあ、行くんだ」

と新田が声をかけて、一同は人波を押し分けて進んだ。途中ですでに列を作った人々に遮られて、それを突っ切ろうとすると、列の人々は青筋を立てて口々に罵った。新田は平気で押し分けた。男達の五、六人がそれに続いたが女達は続けなくてうろろした。その列を廻ればいいのだが涯なく続いているのを迂回するうちに先に行った男達とはぐれてしまふ。あとから来た男達がそれを見て、列の中にいる二人の中学生の間を分けて、

「さ、早く」

と叫んで、女達はやっと通ることが出来た。谷の子供は勇敢にどこかへもぐり込んで抜けた。その向こうに手に持ったレインコートを高く上げて怒ったように顔を黒くして人を押しのけて行く谷の姿が見えた。ようやく一番端の列の後に着いた。春子が仲間を見回すと、みなは四人五人と離れ離れになって他の人々の間にはさまっていた。遠くはなれた二、三人の中に岐部がいた。春子の前にいた住川が、

「おうい」

と呼ぶと、岐部は手をあげて少し心許なさそうに遠くから微笑した。吉本は列から離れて切符をくばったり、また離れた人々を調べて回った。谷は列の間に押しつぶされて平たくなっていたが吉本を呼びとめた。

「まだ切符を切りはじめないのかい」

「そうですね」

と吉本は伸び上がったが列の先は整いもなく人が群れて押し合っていて、改札口の様子も判らず、この列が一体何番の改札に向っているのかも判らなかつた。

「よし、僕が調べて来よう」

と脊の高い住川が出て行って人の群の中に進んだ。頭だけが右にゆれたり左にゆれたりして見えた。吉本もそれに続いた。間もなく大きな眼をして住川が戻って来て、

「向こう、向こう。日光行は向うだ」

と遠くから手を振った。そして自分はすぐそこから左隣りの列を押し分けて突っ切った。こっちにいる一同は吃驚してみなてんでに列を離れると隣の列を通り抜けようとした。隣の列ではまた通すまいとして人々が間をつめて押し合った。再び罵り合い小突き合った。谷の一同が出た列ではその列にいるのが心配になった人々までが離れて谷達のあとに続いた。左隣の次にもまだ三列ばかり突っ切らなければならなかつた。人々は黒くかたまつて揉み合った。警官が飛んで来た。駅員が綱を持って来て張りまわした。谷の一同はもうでんでにばらばらになつてしまった。二番目の改札口の前の列につくとそこは案外人が少なかつた。二人三人と谷の一同の顔がそろつた。春子はまだ人中にいて、みんなとはぐれてしまい、後方を振り返ってきよろきよろしていたが、安子が来てその肱をひいた。

「こつちよ」

「あら、いたの」

先についた阿部達が向うで手で招いていた。谷は一同を振り返って、
「みんな来たか」

と叫んだ。吉本が人数を調べて回った。春子は大きな体の安子にすっかりつかまって、

「大変だわねえ」

「ほんとね」

阿部が二人ばかり前から、

「汽車に乗ってしまえば安心ですよ。もう少しの辛抱」

「そうね」

安子たちはうなづいた。阿部の向こうから住川の顔がのぞいた。

「春ちゃん、こっちへ来ないか。小さい春ちゃんは踏みつぶされる惧れがある。僕が抱いてやってやろう」

「まあ。あんたこそ足許に気をつけなさい」

「大丈夫だ。僕はこの顔で梶をとる」

と住川は下顎を突き出し長い顔を斜めにして人々の頭の上で泳ぐ恰好をした。みんなが笑った。その笑いの中には目的の列に一同そろって入ることが出来た安心もあった。

改札がはじまると、列の人々は今まで傍においていた鞆や荷物を一斉に持って殺気立つて前に押した。改札口の中には大きな看板に「駆けては不可ません。走ると危険です」という字が書いて立ててあったが、夢中になった人々は改札口を通ると女子供を押しつけて、この立看板の傍を日光線の列車ホームへ殺到した。最後部の客車はもう溢れるように人が集まっていた。その次も同じようだった。三両目、四両目、二等車と、春子たちはやり過ぎして前へ向かった。駆けまい駆けまいと思っていた春子の足も、周囲の人々がみな走って行くのにつられて何時の間にか駆けだしていた。一つの客車の洗面所から吉本が顔を出

して手を振って叫んだ。

「ここだ、ここだ」

中へはいると滝子やすみ子がもう先に場所をとって伸び上がってこちらを見て、
「安子さん、春ちゃん、早く、早く」

春子達はやっと腰を掛けることができた。春子達の席の隣には谷や子供達がいて、谷は暑そうに上着を脱いで春子達の来たのを見て笑って頷いた。もう席がなくてあとから来た人々は立っていた。住川が泳ぐようにゆっくりと人をわけてはいつて来た。阿部、新田が来て谷に向って報告した。

「私は鈴木、川中などと向うの車にいます。十二名です。上坂さん、村田さんも一緒です」

「そうか」

「こちらは何名ですか」

「そうだね、おい、吉本君」

「はい」

「この車に何人乗ったね」

「十人です」

「十人と、十二人で二十二名、よし全部だ。それじゃあね、新田君。向うの十二人を第二班とし、こっちの十人を第一班とする。君は吉本君と一緒に向うを指図する。こちらは阿部君は病気だから僕が住川君とやる。そう決めよう」

「承知しました」

汽車は動き出した。

上野駅で乗った日光行の列車の乗客は殆ど全部終点まで乗って日光駅に下車した。谷の一同は駅前の広場で集まって、これから先を電車にするかバスにするかと相談し合った。バスは三、四台いたが吉本はその都合を聞きに行行って戻って来た。

「バスは全部だめです」

電車の姿は見えなかった。そこへ旅客案内所の所員のような制服制帽に腕章をつけた男が、駅前にたたずんで途方に暮れている人々に向って叫びながら巡って来た。

「皆さん。東照宮前までお歩き下さい。もうここはバスも電車も、乗物と言う乗物は一切御座いませんから、お歩き下さい」

一人がその男をとらえて訊いた。

「東照宮前まで行ったら乗れるんですか」

「それは判りません。保証出来ません。何しろ乗物が少ないのに人が余りに多いのですから。……さあ、お歩き下さい。東照宮前まで」

制服の男は歌うように叫びながら行ってしまった。広場に一杯になった群衆はそれをきくと、老婆や子供連れまでも諦めよく歩き始めた。電車に乗らずに馬返まで歩いてしまおうという元気な若者達もいた。谷は思案していたが新田に向って、

「こうなれば、二十人など一度に乗れるような機会はないだろう。一団になって行動するのは不便だから、各自に行動するようにしよう」

「そうですねえ。集合場所は何処にしますか」

「馬返はどうだ」

それから谷は皆に向って叫んだ。

「てんでに歩くんだ。東照宮下まで行って電車かバスに何とかして乗るんだ」

これで汽車の中で決めた二班のきめはたちまち破れた。皆は集合場所も聞かずに歩き出し、新田や吉本が先に立って歩いて行くのに続いた。東照宮へ行く長い坂道には汽車や東武電車から降りた人の波が、見えるかぎりまで黒く動き回っていた。東京に比べるともう大分冷えたが、坂の道は丁度薄日が差して、歩いて行く人々の額には汗がにじんだ。谷は子供や老婆と一緒になので他のものとはずっと遅れて離れた。新田や大部分の男達は先に行き、岐部や病気の阿部や春子や安子の女達は少し遅れたので、結局一同は自然と三班に分れることになった。春子達が坂の上に着いた時、駅の方から電車が上がって来た。

「何だ、電車があるじゃないか」

と阿部は言って、停車場に女達と待つて乗ろうとした。電車は来て停まったが中にはぎっしりと人が詰まって、入口の戸の硝子に平たく頬つぺたをつけて後ろから押し付けられる若い女などを見ると、乗ろうと努力する気にもなれなかった。中善寺行と言う自動車もあとから二台ばかり続いて来た。これは随分空いて立っている人は一人か二人だった。阿部はまた自動車の停留場へ行った。しかし自動車は停まっても戸を開けなかった。中では女車掌が手と首を振っていた。あとの自動車も同じように空いていたが、これは停まりもしないで行き過ぎた。人を乗せ過ぎると、先に行つてから山の坂道が登れないからであった。阿部達は電車や自動車を何台となく待つてみたが、乗れないことに変わりはなかった。思案に暮れて大谷川の縁まで無意識に歩いて来た。阿部は女達に向って、

「ここで電車に乗れないと、馬返まで歩かなければならないが、歩きますか」

女達は元気に頷いた。

「でも阿部さんこそ如何ですか。大分顔色悪いようよ」

と安子は心配そうな顔付をした。

「いや自分ではそれほどでもないですよ。仁丹があるといいが」

「わたし、持って来ましたわ」

「有難う」

安子は手提の中から容器を出して銀の粒を阿部の掌にあけた。春子は安子の美しい横顔や手の指や、仁丹をふくむ阿部の口許を黙って眺めた。

「岐部さん。あんたも歩きますか」

「仕方がないですな」

岐部は諦めたように黒いセルロイド縁の眼鏡の奥で眼をパチパチさせた。彼は阿部よりも五ツ六ツ上だが会社では最近入ったばかりで阿部の指図を受ける方だった。少し喘息があつて乱暴なことは出来なかった。

「それじゃあ、みんな歩くとして、先ずお昼を食べる必要があるが、この辺に腰を下して簡単にやっておきましょうか」

阿部達は大谷川にのぞんだ川縁の三角になった隅に腰を下して、持参の握り飯や鮎などをつまんだ。お腹が出来ると三里ぐらい平気で歩けそうにみな元気になった。そして手回りの物をきちんと身に着けて歩き出した。神橋の下をくぐる大谷川の青く澄んだ水は東京近郊の川の水を見つけている眼には美しく珍しく神々しかった。川の向こうの山は少し色づいていた。道は川を離れて坂を登って行った。しばらく行くと電車の停留場で人が大勢

列をなして並んでいるのに出会った。電車の職員や消防組や巡査がいて、人々を整理していた。阿部は女達を振り返って、

「ここで待っていれば乗れるね、きっと」

その言葉とともにみなすぐ揃って列の最後に付いて、三里の山道を登ろうと言う勇壮な決心はたちまち無用なものになってしまった。電車はここへ来ると一杯の客に無理に入口をあけさせて人を乗せた。ところが一方では全く空の自動車も来た。列になって待っている人々は容易にその中へ消費された。駅前で叫んでいた男の言葉も嘘ではなかった。道の下の方からはまだ続々と人々が歩いて登って来た。ここで停まって列に入る者もあったが、どうせ歩き出したのだからと言う風に元気に通り過ぎて行く者も少なくなかった。阿部達は四十分ばかり待って電車に乗ることが出来た。乗ってから一時間ばかりして馬返に着き、駅の階段を上って改札口を出ると、阿部達はまた吃驚してしまった。ケーブルカーを待つ人々が二列になって駅の待合室から表口へ出て右に折れ、そこから坂に傾斜した広場へ下って続き、広場のどんづまりから左に折れ曲がって戻って来て表口の前まで続いて、ざつと五、六百人はいただろう。ケーブルカーがひっきりなしに上下して人を運んでいるながらこの有様なのは、ここが下から来るのに電車と自動車の両方の終点になっているからだろう。ここへ来るともうとても寒くなった。霧が山の方からだんだん低く下りて来て、停車場と広場を包み、列の上を走って過ぎた。

阿部はレインコートを出して着たが、黙って立っていると寒いので堪らなそうに足踏みをした。春子の前に立った安子が振り返って、これも寒さにふる慄えて来た春子に向かって、

「寒いわね。あんたの頬つぺた鳥肌が立っているわよ」

と卵色の手袋をはめた指で春子の頬をつついたが、不意に両手で春子の膨らんだ両頬を抱えるようにした。春子は、

「あつたかい。いい気持」

と言って眼をつむった。自分などの使ったことのないような香水の香がした。

「ホホ」

と安子が笑った声が余り近かったので、春子は驚いて眼を開いて身を引いた。

「さあ、前が進みましたよ。前進！」

後から岐部が咳をしながら言った。巡査が近付いて来て列の中の若い丈夫な青年や娘には、

「中禅寺湖までは一時間もあれば楽に行けますよ。元気のある人は歩いた方が早いですよ」と言つて回った。二、三十人の若者はその言葉に従つて列をでてリュックサックを背負い直し、日光町で買った桜の杖を握りしめて坂道を登って行った。

阿部達がケーブルカーに乗ったのはそれから三十分ばかり後であった。春子はゆっくり登って行くケーブルカーの窓から外を眺めようとしたが霧が一杯になって五米先も見えなかった。しばらくすると急に霧が来て、ケーブルカーの軌道から遙か下の方の溪流になった大谷川の白い水が見えた。春子は急斜面の軌道を下の方へ見下ろした時、急に何かの間違いでこの斜面を車が非常な勢いで走り落ちて行くと言う想像が反射的に起こつて来てゾツとなった。狼狽して眼をそらせたが、背筋の下の方の何時までもむずむずするような気持ちは抜けなかった。上の停留場に着くと春子はホツとした。阿部達は駅前からバスで中禅寺湖畔に行くつもりだったが、広場に出て見ると山の霧の行過ぎる中にここにもバス

を待つ列が二列になって半町近くも続いていた。みな寒そうに慄えて、中には厚いショールをかけたリ、油紙を被ったりしているのもいた。阿部達はもう行列する気もなく、行列を見るのさえ苦痛だった。駅の前には「バスが故障で動かないことがあります。皆様お歩きになっても差支えありません。歩いて二十五分」という看板が立ててあった。空車が六台も七台もあつたから故障なのだろう。実際、駅の中の一室では三人の職工が真っ黒になつて故障の分解したエンジンに電灯を近付けて修理していた。

阿部は、

「差支えありませんと言うのは、我々に歩く許可を与えてくれるような調子だね。はは。とにかく歩こう。」

と言うとみな言下に応じて広場を抜けて歩き出した。道は最近の修繕がないらしく所々荒れていたが、本当は立派な舗装の自動車道路だった。阿部達の他に歩く人も多く、まるで銀座通の宵にも負けないように人々が群れて続き、間もなくトンネルがあつてそれを抜け、人々は霧の中を元気で大声で話したり歌ったりして行った。今まで、立ち通し待ち通しですつかりふさいでいた岐部も歩き出すと元気が出て来た。僅かな霧の晴れ間から、山の傾斜の紅葉した木々やその中に交じつた黒い杉などが見えると、阿部に向つて美しい美しいと連発した。

「僕は中学生の頃に修学旅行でここへ来た事があるんですがね、その時の有様を今思い出そうとしているが全然思い出せない」

「中学の頃って言う」と

「そうだね、考えて見るともう二十三、四年前になる」

「二十三、四年？わはは。山も変わる二十ですよ、それは」

「私なんかとても生まれなかった頃ね」

と春子が言った。

「私だって生まれたかどうかぐらいよ」

と安子が言った。

「その頃はケーブルカーなどはなかった」

「そうでしょう。この谷の向こう側の道ですね」

「何でもこんな風に霧に逢って吃驚したことは覚えている」

霧の中を自動車が疾走して行くとそのあとがトンネルのように霧の消えた穴が出来て、その中を歩いて行く人々の後姿が黒く鮮やかに浮び上るのも面白かった。二つ目のトンネルは長かった。出口の明るく見える遠くにまで歩いて行く人の群のシルウエットが幾重にも重なり動いていて、トンネルの天井にはね返る叫び声や足音で人々は次第に騒がしく興じ始めた。その中をかき回すような大きな音を立てて自動車が走り抜けて行った。天井の反響が面白くてあちこちで叫び声を挙げ出すと、岐部も負けないようになって、

「ウオー！」

とさげんだ。前に歩いていた阿部が吃驚して、

「誰だ、岐部さんか」

女達は笑い出した。岐部は尚も胸を張って天井に向いて、

「僕の声は凄いで！僕は猛獣だあ！ウオーッ。ウオーッ」

女達は歩きながら体を二つに折って笑った。岐部が叫ぶと、それに応じてあちでもこち

でも負けないように獣の叫び声や山羊の鳴声や笑い声が起って、まるで耳がつぶれてしま
いそうに喧やかましくなった。その中に岐部の声は一際高く他を圧して響いた。人々は笑いなが
らトンネルを抜けて、笑い声はトンネルの中で凝しこった可笑しさが音を吸う霧の中に出てふ
やけてしまうまで続いた。しばらくして気がつくとき岐部の姿が見えなかった。阿部は前後
の霧の中をすかして見て、

「岐部さんはどうした。先に行ったかな」

「いいえ、あとよ」

待っていると霧の中から俯いてとぼとぼやって来る岐部の姿が現れた。

「どうした、岐部さん。いやにしよんぼりしてしまったね」

岐部は黙って皆のところまで歩いて来て、阿部と並んで歩きながら、

「僕あ、淋しくなった」

とポツリと言った。

「なあんだい」

阿部は岐部の腕をかかえて、

「さあ、猛獣。元気を出して」

春子も反対側から岐部の手をとって、

「元気をお出しなさいよ、岐部さん」

と引っ張った。岐部は兩人に引きずられるようにして歩いていたが、

「春さんの手は暖かいなあ」

と言った。春子は狼狽うろたてて手を離すと岐部の後へ回ってそのリュックサックをえしえし

と押した。

中宮祠の茶店にはもう谷や新田などの組が暖かい飲み物を呑んで阿部達を待ち草臥れていた。ここへ着いたのは一番最後から来た筈の谷が一番早かった。東照宮へ行く坂で空電車が駅へ行くのを見て駅へ引き返してそれに乗ったからであった。谷は阿部達を見ると何か食いながら出て来た。

「みんな来たか」

「遅くなりました」

「丁度よかった。もう三十分ばかりしたら湯元行のバスが出るから、一休みして何か飲み給え」

「並ばなくてもいいんですか」

「ああ、もう予約してあるんだ。番号札をもらってある」

吉本が心配そうな顔をして来た。

「なんだ」

「上坂さんが見えないんです」

「何処からはぐれたんだ」

「駅で別れたんですね」

「それは困ったね。自動車は予約してあるが、若しそれまでに来なかったら、君に最後の自動車まで残って貰うんだね」

「そうですね」

休憩所では雑煮が出来て、暖かいのが何よりだった。阿部は食べながら岐部を見た。岐

部は爺むさく小さい体をこごませて薄い餅を前歯で切りながら口を動かしていたが変に淋しい姿だった。彼は阿部が微笑しながら自分の方へ顔を寄せて来たのに気がついて、眼を上げた。阿部は何か力をつけるような言葉でも言っていて、背中でも叩いてやりたいような顔付だったが、岐部の方で先に言った。

「ね」

「何ですか」

「この雑煮うまいじゃないですか」

途端に阿部は笑い出した。

「ははは。うまい！」

岐部は笑う阿部の顔を吃驚して見つめた。

「うまいですね。元気がつきましたか」

「うん」

岐部は素直にうなずいた。

霧は相変わらずゆるい風と共に低く道を走って通っていた。ケーブルカーから歩いて来る人、バスで降りる人、旧道を歩いて登って来る人、引きもきらず前の道を通って湖の方へ行った。この日こうして何千人と言う人が中宮祠へ登って来たと言うが、その人々は一体どこへ行ったのだろう。泊まる場所はあったのだろうか。しばらくして一同支度をして湯元行のバスの発着所へ行った。走って行く霧の中に行くと雨にでも打たれているように寒かった。発着所には一人の男が客の指図をしていた。

「湯元に旅館の予約をしてある方だけです。いいですか。フリで行ったって絶対に泊ま

れませんかからね。バスで行くだけ無駄なんですから」

二人の若い娘が薄いショールを掛けただけの、コートも着ていない姿で発着所の前に立っていた。男は訊ねた。

「貴女方はどちらへ」

「湯元へ」

「予約があるのでですか」

「ないの」

「駄目駄目。駄目です。早くこの辺で旅館をお探しなさい。この辺でも、もう殆ど無いですよ。まごまごしていると宿はないし、帰る電車もなくなって野宿ですよ」

野宿ときくと二人の若い女は吃驚して眼を上げたが眉をしかめて、二人とも同じようにショールで鼻を隠してのろのろと歩き出した。その無表情の眼は途方に暮れた判断のつかない気持を表していた。二人は霧の中を湖の方へ消えて行った。二人の姿を案内所の男はじっと見送っていたが、そこへ霧の中からバスが現れると我に還ったように叫んだ。

「谷さんの組の十七番まで」

春子達はこの十七番の中にいたので先に乗り込んだ。そこへ霧の中からひよっこり上坂がやって来た。残り組になった吉本は列から飛び出した。

「お、上坂さん、どうしたんだい」

上坂はこれをきくと、それはこっちこそ言いたいというような顔付をしたが、黙って微笑った。

「心配したぜ、何処ではぐれたんだい」

「日光でね……皆が見えなくなってしまうんで、電車には乗れないし、面倒くさいから歩いて来た」

「ずっと歩いて？そいつあ凄い」

「このバスがなかったらここから湯元まで歩こうと思って、すっかり支度をして、シャツも薄着にしたんだ。足には自信があるからね。なあに歩いたって七時頃までには着く」

「そりゃ、それでいいかも知れんが、兎に角心配だったぜ」

上坂はそれに返事をしないで、リュックサックを下し、まくり上げたズボンを下したり、リュックサックから出したシャツを着たりした。そして尚も心配したことを繰り返している吉本へ、黙って飴玉の缶を差し出した。

春子達の乗ったバスには客が二十人しか乗っていないなかった。十七番の住川で人が切れたのを見たのか、不意に通りがかりの三人の男がバスの入口に駆けて来て台に足をかけた。客の整理をしていた男は吃驚して口を尖らせて走り寄り、足をかけた男の肘をつかんで引き戻した。

「何です、何です、貴方がたは」

「湯元行のバスだろう。こんなに空いているのに乗れないのか」

「駄目ですよ。番号券も買わないで、何です貴方がたは」

案内の男はただ無性に口をとがらせて通りがかりの男をなじった。

「何でえ。乗れねえなら乗れねえと言うだけでいいじゃねえか」

三人の男達はぶつぶつ言いながら離れると道へ出て湖の方へ消えて行った。案内の男は入口の前に立って合図してバスは発車した。

自動車は湖の岸を右に曲がり左に曲がって辿って行くうちに、霧は晴れて行った。もう夕暮れ近い陽の弱い光が曇った空を透して湖に落ちていた。湖から離れると自動車は恐ろしく左右に傾きながらぜいぜい言って山の坂のくの字道を登った。木々の紅葉はまだ紅いほどにならない黄色な明るい美しい色で、その葉の中に黒色や灰色の幹の肌が鮮やかに浮き出していた。中には細かい葉の黄色がまだ緑がかっていて、まるで春の新芽の萌えているようなもあつた。

「皆様、左にお見えになりますのが龍頭りゅうとうずの滝で御座います」
春子は住川の後に坐っていたが、住川はこの時振り返って、

「お見えになります、は面白いね」

と言った。バスの女車掌はチラと住川の方を見て、前方に向き直った。バックミラーのところにはぶら下がった人形はこの車掌達の心持なのだろうか。心持と言えば右の隅の花立には白い花が二輪生けてあつて、その上の天井にはお酉様の土産の飾り物が差してあつた。よく見るバスの中の図である。

戦場ヶ原せんじょうがはらは山の間まの広い枯草の原、その原に黄葉した落葉松がまばらに立っていた。最前列にいた岐部は、

「いいねえ。こんなところを独りで歩いたらいいだろうなあ。侘しくていいだろうなあ」と繰り返しつつぶやいた。

湯ノ湖が見えると岐部は意外なように眼を見張って大きな声で言った。

「何だ、こんなに登っても湖があるんだね。何だい、これは」

丁度その時女車掌が説明しようとして客の方に向き直った時なので、彼女は出鼻を挫か

れたような顔付をして岐部をチラと見た。そして説明をする前に少し間の悪そうに空咳をして、

「左にありますのは湯ノ湖、湯ノ湖で御座います。海拔千五百米。千古のなぞを秘めた：

…」

湯元の宿近くになると温泉の香が鼻をついた。

「ああ臭う、臭う。俺はこの臭を嗅ぐのは五年振りだ」

と言う声が乗客の中でした。谷の予約した旅館は終点のすぐ前だった。湯にはいった後、一同丹前の姿で大広間に四角に並べた膳についた。正面に坐った谷の音頭で国民儀礼を行った後、谷は米持参酒持参で寸暇を割いて行ったこの旅行について演説をした。酒が始まった。男達はこの日のために貯めて用意して持って来た酒を互いに注ぎ合ったが、同じように呑みながら酔って来るのと酔わないのとは出来て来て、配給とか平等とか言う事に軽く一つの問題を出したと言ってよかった。だんだん盃のやりとりが激しくなり席が乱れ騒がしくなってきたので、女達はさっさと飯にして食べ終えろと席を立った。二階の自分達の部屋に引き上げて、飴玉や煎餅、これも彼女達が今日のために久しい前から蓄えてためておいたものであるが、それをかじり楽しみながら女達は雑談した。大広間から歌がきこえて来た。

「誰でしょう、あれ？」

「吉本さんじゃない？」

「阿部さんかも知れないわね」

あとまで残って男達の騒ぐのを見ていた滝子が腹を抱えて転げるように笑いながら戻っ

て来た。

「どうしたの？」

「吉本さんがねえ、裸になって変なようにやした踊をするの。とってもうまいのよ」
滝子はまだ堪らないように腹を押さえた。

「さつき歌を歌ったの誰？今ついさつき」
と安子がきいた。

「串本節？」

「ええ」

「住川さん」

「あら、住川さんなの、案外いい声だわねえ」

春子達が床にはいつてしばらくすると大広間からどやどや二階へ上がって来る足音がした。

「上坂さんは何処へ行った。見えないな。おい、村田さん。おい」

「俺あもう駄目だ、勘弁してくれ」

「おい、村田さん、駄目じゃあないか、しっかりしろ、ここは廊下だぜ」

「苦しい。便所へつれてってくれ」

「便所か。よし、出すものを出せばいいんだ。それじゃあまた階段を下りるんだ、いいか。

よいしょ」

間もなく階段をまた駆け上がって来る音がした。

「おい、住川。救急箱、救急箱。村田さんが便所で苦しがつてるんだ」

二、三人駆け下りて行った。春子は眼を開けて安子の方をみると、安子もこの騒ぎに首を持ち上げたところだった。

「ねえ、安子さん」

「ええ？」

「どうして男の人って、お酒をのむんでしようね。あんなに苦しがるの判っているのに」
安子は笑いながら、

「あれがいいんでしょうよ」

「何がいいんでしょうか。わたし、わからないわ。……判らないわ」

春子の黒い大きな眼は悲しそうだった。安子は、黙って微笑っていた。

春子がとろとろとした頃、また廊下で声が出た。

「俺の寝床は何処なんだ。怪しからん。誰か二人分で寝た奴がいるな」

それは住川の声だった。

翌日は午前中、付近を散歩して午後早く自動車で中禅寺湖に出て日光に下る予定であった。しかし楽しみにしていた午前の散歩は、朝起きてみると雨が降っていて駄目だった。どてらを着たまま傘をさして湖の岸に出掛けて行った二、三人も早々にして帰って来た。部屋にいるのも退屈なので下の薪ストーブのある部屋で無駄話をしたりピンポンをしたり湯に入ったりした。二階の一番大きな部屋には、広い真中で新田が独り小机に向ってノートに何か書いていた。難しい顔をして考えたり書いたり、煙草をくゆらせたりして、他の人が入って来ても気がつかなかった。他の者もそういう新田の姿を見ると遠慮して出て行ってしまふのだった。新田はそういう温泉宿の大一座の客には不似合いな靈感に満ち

た顔をして、永い間ノートに向っていた。襖を開けて続いている隣の小さな部屋には春子が坐つて、窓から雨のふついている宿の庭を眺めていた。紅葉した灌木や枯葦の向こうに雨に打たれてぶく光っている湖があった。湖にせまっている山々は低く雲に隠れてまるで無いもののように見えた。宿の庭の中央に植木台が四角に作つてあつた。そこにある植木すらも紅葉していて、何だか眼にふれる木ふれる木がことごとく紅葉しているようで胸にもたれるような気持だつた。植木棚の蔭からその角を回つて一群の家鴨が現れて来た。家鴨共は雨に打たれて寒そうに空に向つて鳴きながら、よちよちと絶えず体をふつて歩き回つた。春子はその歩き振りをじつと見てみると自分の体もつられて左右に振られて来るような気持がした。岐部が春子のいる部屋にそつと入つて来た。岐部は隣の部屋で新田が机に向つているのを見るとこちらの部屋の卓の前に新田と向き合うように坐つて、顎をなでながら新田の様子を眺めた。新田はすぐそれに気がついて書くのを止めた。岐部は依然として顎をなでていた。新田はノートをしまつて立上ると煙草とマッチを持って岐部のところへ来た。向き合つてしばらく黙つていたが、

「岐部さん、あんたは暇と言うことをどう考えるね」と突然言つた。

「暇？暇とは何です」

「暇があると言う暇ですよ。退屈だね」

「退屈。退屈はいいね。僕は退屈が好きだなあ」

岐部は尚も加えて言つた。

「僕達は忙しい身だ。だから余計に言いたくなる。退屈をして退屈たらしめよ。退屈は孤

独でいい。退屈は侘しくていい」

こう言う岐部はこの年になってまだ独身でいる人だった。新田は黙ってしまった。さっきの靈感に満ちた新田の姿は、もっと違った意味で暇と言うことと関連がありそうだったのだが、生憎岐部の方では察しがなくそれで行く。

「岐部さんは碁や将棋はやらないのかね」

「やらないね。僕は暇さえあれば碁や将棋を打つ奴の気がしれない」

「だけれどもね」

「折角の退屈をそうしてつぶす気にはとてもなれない。少し暇があると碁将棋をする。球をつく」

「だけれどもねえ」

「麻雀をやる、花をやる、酒を呑む。遊びでなくても小さな仕事をする。電車の中で翻訳をする。そんな生活に何の反省や思索があるものかと思うね」

「だけれどもねえ、僕の知っている哲学者に……」

「哲学者にも碁や将棋を打つのがいるのかねえ。呆れた俗物だ」

「ウフ。まあ俗物かどうか知らんがね。その人が言うには、碁将棋をやっても、インデアヴェルトザインだと言うんだ」

「どう言う意味ですか？そのインデアヴェルトザインと言うのは」

「世界の中にある……」

「どういう意味ですか。その世界の中にあると言うのは」

子供の質問のように岐部は追及する。新田は再び黙ってしまった。どうもこの二人の会

話は永続きがしない。しばらく話題を探した末に、新田はまた突然、

「飛び込みね！」

「飛び込み？」

「水泳の飛び込み。あれでザブンと飛び込んでそのまま手を伸ばしていたら、どのくらい進むと思うね」

「さあ」

と岐部は興味のなさそうな顔をして、

「そいつは人による。素人と選手とは違うだろう」

「勿論だけれどもね。若しあんたのような素人が飛び込んだとしたら」

「僕は泳げない」

「だけれども、まあ、普通の人だったらどのくらい行くと思うね」

「さあ、五米も行くかねえ」

「いや、どうしてどうして、普通の人でも十米は楽に行く」

「そうかい」

「一寸泳げれば二十米近く」

「そう」

「選手なら二十五米行く」

「そうかい」

張り合いがなくて、この会話はまた途切れた。岐部は黒い縁の眼鏡を窓に向けて顎をなでた。新田は肱をついた両手で耳をふさぐようにして眼を卓に落したまま考え込んだ。春

子が窓に立って戸外に向って手を振った。戸外では植木棚の傍を住川が独り油紙を被って来る姿が見えた。手には真っ赤な紅葉の枝を持っていた。

昼飯は宿で出来ないと言うので握り飯を作ってもらって部屋で食った。沢庵や昆布と共に薄板に包んだ二つの握り飯は藁を踏みつぶしたように大きく平たかったが、食べて見ると案外うまかった。雨はまだ止まなかった。昼食を終わって仕度をして宿の玄関へ出た。バスが四台続いて来て、これがまた中禅寺湖に戻るのであるが、その四台目に一同乗り込んだ。道は下りでバスは速かった。途中の道には二人三人と雨に濡れしよぼたれて歩いてたが、自動車はその人々の狼狽して逃げよけるのへ泥をはねとばせて進んだ。

中禅寺の終点に着いた頃は雨がますます強くなっていった。その雨の中に人々の混雑は昨日にも劣らなかった。バスの発着所の付近には家の軒下や木の下などに、日光へ戻るのかこれから湯元の方へ行くのかわからない人々が一杯雨をよけて立っていた。ぬかるんだ道を、赤い腰巻を出して尻を端折った若い娘の一隊が、雨具もなく雨に濡れて足には草履ばきや薄い下駄ばきのままびちゃびちゃと泥をはね返して行った。軒端にたたずんでいた人々はこれを見て、身につまされた同情やら実際に見た感じの悪さやらで顔をしかめながら、凄く紅葉だと言いつつ合った。

中宮祠のバスの発着所では、ケーブルカー行のバスを待つ人々が長蛇のように並んでいた。出口から待合室の中を二回りして待合室の外の軒下を巡り裏から軒下を離れて、雨が音を立てて降っている林の中へ延びていた。谷の一同は一休みした後で、休憩所の軒下に出てこの長蛇の列を眺めたが、すぐそれに続いてあとへついて並ぶ決心が出来なかった。林の中で雨に打たれていれば軒下へはいる順番の来ない前に身はそぼぬれてしまう。しか

しそれかと言って女子供が一緒ではケーブルカーまで雨の中を歩くことも出来なかった。
「こうしていても仕様がな。並ぼうじゃないか」

と谷は先に立って雨の中へ出て、林の中の列の最後についた。一同もぞろぞろそれに従ってついた。春子は休憩所で谷が買った油紙を一枚もらって頭から被った。春子の前には安子や滝子がいて後ろにもすみ子や岐部などがいたが、みな黙って雨に打たれていた。目の下まで油紙を被って、黙って雨の油紙に当たる淋しい音をきいていると自分がたった一人は何処か知らない処に立っているような気がした。軒下に入った時はみな救われたようにお饒舌りになった。春子が軒下を巡って進んで行くと待合室の中を進んでいた列の中から不意に住川の大きな体が窓に見えて、住川は春子に笑いながら、

「やあ、お久しゅう」

と言った。二度目に中ですれ違った時は住川は春子の顔の方にかがんで額でも嘗めそうに舌を出して見せた。あちこちでそんな冗談をやっている声があった。三十分ばかりしてやるとバスに乗り込むことが出来た後ケーブルカーの停車場について見ると、ここにも雨の中へ二十間ばかりはみ出て人が並んでいた。ここは警官が一人に警防団が二人で整理して二列になった人は駅の待合室の中に腸のように三曲りに曲って改札口に達していた。そればかりではなく中禅寺湖の方へこれから行く人も二列になって雨の中に並んでいるのであった。駅の一室では昨日と同じように電灯を自動車の故障機械に近付けて三人の職工が真っ黒になっていた。中宮祠とは違って人数が多いだけに、はげが遅かった。二十分三十分と経つと流石にもうみな草臥れて来た。考えると昨日の上野以来長い汽車の間は別としてその他の途中の殆どの時間は立って過ごしたようなものであった。時計は四時を過ぎ

ていた。これで行けば日光の町に六時につけばいい方である。もう住川は春子にすれ違ってもふざけなかった。春子も疲れて来て笑うのが大儀になった。柱の傍に来てそれに凭れて眼をつむるとそのまま坐ってしまいたいようだった。駅に喫茶室があり土産物なども売っていたが、列から離れてわざわざ土産を買う人も少なく、ましてお茶を呑むような呑気な人間はいないので、待合室の方は人混みで騒ぎをしていながらここは全く閑散で、給仕女達は入口に立って暇そうに人の群の押し合っているのを眺めていた。四時半近く順番が来てケーブルカーに押し合って乗った。昨日と同じように僅か十分にもならない乗車に四十分以上も待ったのであった。そして終点に着きケーブルカーから降りた時は、人々は互いに一人でも追い越して早く電車の改札口に並ぼうと、ケーブルカーのホームの危ない傾斜を先を争って走った。電車の改札口には幸いに余り並んでいなかった。ケーブルカーで降りた人は電車と自動車と半々になったからだろう。しかし電車はすでもう一杯で春子は車掌台の隅へ押しつけられてしまった。しばらくして電車はもう暗くなりかけて来た夕暮のなかへやっとのろのろとして出て行った。雨が夕暮の薄明りの道の上にしぶきを上げて降っていた。春子は押しつけられた硝子戸から連結した前の電車のおきに僅かばかり戸外を見ることが出来たが、もう戸外を眺める気になれなくて、眼をつむっていた。電車のゆっくり走る音と窓硝子に当たる雨の音とが単調に続いた。春子は眼をつむっていても眠くはなかった。しかし、非常に疲れて肩の両側から感覚が抜けて足も体も下へ沈んで行くようだった。母や兄や弟がいる自分の家の温かい畳の上が今眼の前にあったらどんなにいいだろう。そんなことを思うと、何だか東京がとても遠いような、このまま行っていつ戻れるか判らないような不安な心持になった。

日光町の坂の上に谷の一行が夕飯を予約した休憩所があった。電車を下りると春子達は雨の中を駆けてその家に行った。がらんとした天井の高い土間に白いタイルの卓が並んでいた。雨が激しかったので客は谷の一行だけだった。その家で卓の上に夕飯の用意をする間、春子達は隣の部屋になっている土産物売場を見て歩いた。湯元でも中禅寺湖でも土産物を漁ればその時間はないことはなかったが、何だか今まで変にせわしなくて、また暇があると今朝のようにぼんやりしていて、物を買う気持ちになれなかったのであった。土産物は沢山並んでいるのを遠くから見ると一寸買いたくなるのであるが、さて買おうとして手にとって見ると菓子盆の蓋がそっていたり、傷だらけのパイプだったり、金具の曲った財布だったりして厭になっってしまうのだった。春子は弟の為に寄木細工の筆入れ、これも気に入らないけれども他になかったので、それと自分の葉書入れなどに使おうと思って同じ寄木細工の小箱を買った。岐部もぶらぶら見て歩いてしたが、矢張り気に入ったものがないと見えて一つも買わなかった。しかし頭の上にくつも並んで吊下げである大きな瓢箪の炭取を不図眼にとめて、俄かに買いたくなったのか方々に下げてあるのを色々と見比べていた。住川が寄って来たので岐部は、

「どうです、あれを買って帰ろうと思うんですが」

「え？あの大きな奴ですか」

住川は笑い出した。

「考えた方がいいですよ。とくと考えた方が。とかくあんなものは、買ってから後悔しますよ」

「そうだね」

岐部は惜しそうに眺めながらも断念したようであった。食膳には昨日の酒の残りがついた。吉本はきよろきよろしていたが、

「困ったよ」

と住川に言った。

「どうした」

「上坂さんがまた見えないんだ」

「え？またかい。今に来るだろう」

「しかしここで逢わないと困るね」

「今日は何処からだい」

「馬返からだよ」

飯がはじまりかけた時、今の話に応ずるように、ひよいとまた上坂が入って来た。吉本は立上って、

「お、上坂さん。どうしたんだい。また居なくなっただんで、実際。心配させるぜ。ま一杯どうぞ」

吉本は上坂に立て続けについてやりながら、

「心配したぜ、ほんとうに。昨日だってそうだけど、すぐ見えなくなるんだからな。心配させるぜ」

吉本は立上って谷の方に注ぎに行った。新田に注ごうとすると新田は遮って、

「いや、もう」

「いやいや。沢山あるんですから。兎に角乾杯して下さい。インデアベルトのために」

「ええ？」

「いやあ、耳は速いです。さ」

上坂と同じように他の工場から呼ばれた村田は上坂に向って、

「馬返の何処ではぐれたんです？」

「いや僕が土産物を買っている間に、みんないなくなっちゃった」

「そう言う時はあの人達に断っておくのですね」

「いや、そのときはちゃんと断っておいたのですがねえ」

上坂は面白くないような顔をした。

「それはそうと、あの人達は馬鹿に呑気にしていますが、七時の東京行に乗れるんですかねえ。私はさっきバスの人からきいて来た。駅は大変な人だそうですね」

「この雨じゃあ、何しろ明日まで居る予定だった人までもどつと帰ると言うわけですからね」

「若しそれが駄目なら、あとは八時の宇都宮行。それにも遅れたらここへ泊らなければなりません。泊ろうたって不意の客の泊まれるところなど、この辺にありあしませんよ。そうになったら事ですね」

「事ですねえ」

二人は盃をおいて心配そうに顔をつき合わせた。

時計は六時半近かった。今迄の経験から言って、立ち並ぶ為にはもうそんなにゆっくりしている時ではなかった。吉本が座に戻ると三方から手が出て、吉本のビールコップには酒がビールのように注がれた。吉本は手を振って上坂の方を向いた。

「ね。上坂さん。ほんとにあんたは心配かけますよ。え？」

「まあ、そのコップをあけなさい」

「いやこれは僕が……」

阿部が吉本の傍に来た。

「吉本君。もう時間じゃあないか。もう女達はとうに駅の方へ出掛けたぜ。とても混んでいると言う話だが、君一度駅へ電話をかけて見たらどうかね」

「よし。かけましょう」

何時もと違った変に大袈裟な傾き方をして吉本は電話の方へ行った。阿部はその歩きつきを見て首をひねった。

その頃春子達はもう日光駅にいた。客は雨の為に外に立っている人はいなかったが、一歩待合室にはいると一杯の人が火のようになって押し合っていた。列は曲がりくねっていてそれが一本なのか、二本か三本なのか見当がつかなかった。春子達は一度その中の一つの終についたが間もなくそれは切符を買う列だと判って止めてしまった。切符は吉本がまとめて買うことになっていたので。黙っている岐部の傍に、春子も黙って立って群衆を見ていたが、思わず溜息をついた。

「嫌だわ。ほんとにこりこりしたわ。もう来ないわ。わたし」

岐部は黙って頷いた。時計は七時だった。もう汽車が出る頃だが、群衆の列が動かないところを見ると、まだ改札をしないのかも知れない。主だった連中が来ないので女達や岐部は気が気でなかった。阿部が来た。

「阿部さん、みんなはどうした？ 一体この汽車に乗る気なのか乗らない気なのか」

「今すぐ来ます。仕様がな、今までやってたんですよ」

阿部は切符を買いに行った。雨の中を谷以下が狼狽ててやって来た。みな駆けてでも来たように赤い顔をして大きな息をついていた。

「みんないるか」

と谷が真つ赤な顔に眼をぎらぎらさせて叫んだ。他の者も真つ赤になって口々に叫んだ。

「落伍した者はないか」

「並べ！ 勘定するんだ」

「番号！」

「まで！ 四列に並べ！ それから番号だ」

「ここは三列だ」

「俺が並べてやる。ここんどこ足りないぞ！ 前へつめる、前へ！」

「一人一人勘定した方が早いぞ！」

「いや番号だ！」

隊伍の中にあるべき者が各自に指揮者のような気になって怒鳴ったり列を離れて人の肩を押したりした。女達はただおどおどして並んでいた。吉本はすっかり酔ってしまった。住川の腕にマリオネットのようにぶら下がっていながら、

「上坂いるか。上坂あ！ 心配させるぜ！」

と怒鳴った。上坂は上坂で安子に谷さんの家の人が何人と他の人が何人と手帳に書きとめては探して勘定していた。あとから来た連中は汽車の駅へ来る途中電車の中から見ると東武電鉄の方が空いていたようだからと言って、そっちへ向かおうと言う案を出した。そ

の相談がまとまらないうちに、後方の待合室の中で新田が、

「改札、こっちだ」

と呼ぶと、一同はたちまち東武の方の相談を蹴って待合室の中へ雪崩のように駆け込んだ。何か判らないが一つの列のあとに続いて並んで、新田のくぼる切符を受取って改札を受けるとホームへ走った。谷達の入るのが遅すぎて汽車はもう東京行ではなくて宇都宮行の日光発最終だった。しかもこれももう満員を通り越して、どの入口にもホームにまで溢れた人が、卵をもった蟹の腹のように十人二十人についていた。春子は阿部のあとについて駆けた。住川はずっこけそうになっている吉本をかついで駆けた。その住川も真っ赤になつていた。谷は子供と一緒に先の方へ走って行った。春子は中程まで来て混んでいるデツキの入口をあちこち駆けているうちに安子も滝子も見えないのに気がついて、もう自分ひとりだと思ふと胸が絞めつけられるように息がせわしくなった。阿部の呼ぶ声があった。見るとそこは手荷物車で、もうすでに一杯の人が入口にまで溢れ、阿部は入口によりやくは入れて中の方を向いて立ちながら奥から押して来るのをやっと支えていた。阿部は春子を呼んだが、向き直ることが出来ず、後ろ向きのまま手を出して叫んだ。

「春ちゃん。早く」

春子は手がとどかなかつた。入口の敷居まで人の足が立っているのではそのままでは割り込み様もなかつた。そこへ住川と吉本が来た。住川達は男の力で掛け声をかけて阿部の後から押し上がった。結局春子ひとりホームに残された。春子は今度こそはほんとにひとりだと思ふと動悸が一層高くなつて入口に手を差しのべたままおろした。その時後ろに岐部の声がして、

「さあ、早く、構わず上んなさい。早く」

と無理に春子を入口の敷居に足をかけさせた。そして春子の尻に手をかけて、下からうんと力をこめて押し上げた。春子は全身を前の客に押しつけられ、息がぬけて胸も腹も平たくなり、眼から火が出て全身が押しつぶされるようだった。

「押すな！押すな畜生！」

「子供がいるんだぞ！」

人々は手荷物車の広い中に立ったまま一杯に詰められて、支えがないので海の波のように四方に重くゆれて喚きながら押し返した。春子はようやくやくそこに一人分ぐらいのはいり場所を獲たが、その安堵よりもただ息が苦しく、入口の格子につかまったまま眼の前が黄色く見えているばかりだった。

「おい、入口を閉めろ。そのままじゃあ危険だぞ」

と誰か叫んで、一人が春子を邪慳に押しつけて戸を引き出した。戸をしめて春子は戸に寄りかかることが出来て、体が少し楽になると今まで抑えてそして半分は夢中でまぎれていた気持ち俄かに堰を切ったように走り出て来て、鼻頭が刺すように熱くなった。

「もう、わたし……」

と春子は持っていたポストンバッグに顔を強く押し当てた。喉にこみ上げて来る「母さん」と言う声をやつと口の中に噛みこらえてしゃくり上げた。

「どうした、春ちゃん」

阿部の声でした。

「駄目だよ。しっかりしなけりやあ」

春子はやっと顔を上げてハンカチを探った。涙が黒い眼から溢れて頬をぬらし鼻の先にぶら下がった。阿部は笑いながら、

「春ちゃん。あんたばかりじゃあないよ。見なさい小さな子供だってお婆さんだってみんなこの中にいる」

「どうした。どうした」

と住川が後からのぞいた。上機嫌の大きな顔に髪が乱れて額に覆いかぶさっていた。住川は阿部の肩につかまって

「春さんは泣いとるか。徒らに、な流しそ、ペルルの如き君が涙……詩にもならん。阿部さんや、ハンケチを出してチンとさせておやり」

春子は腹を立てて住川を睨みつけた。

「黒き瞳、憂いを含める……いや、怒りを含める……」

「酔っ払い！」

と言って春子はまた泣き出した。阿部は、

「構うな、構うな」

とよろけ凭れる住川を支えて言った。汽車はなかなか出なかった。扉の窓から見るとあれほど入口に入り切れなくて溢れていた人が、どう押し込んだのか一人も見えなかった。

ガランとしたホームに遙か向こうから一人の女が駆けて来た。安子だった。阿部は、

「安子さん！どうした？」

「あ、ここに居たの。信ちゃんが見えないのよ」

「信ちゃんが？そいつあ大変だ」

と阿部は戸を開けて飛び出した。信と言うのは谷の子供だった。春子はそれを聞くと再び新しく泣きじゃくった。吉本はそれまで真つ蒼になって入口の戸の下にうづくまっていたが、阿部の飛び出したあとから何か叫びながら危ない足つきでホームに下りた。住川や岐部が吃驚して、

「おい、おい」

と叫んで手を伸ばしたが間に合わなかった。吉本はホームに立って二、三步進んだが、たちまち右の方へよろけ出し、きりもなくよろけて行ってやつと柱の前で立ち直ると、今度は左へよろけ出し、そちらへもまたきりもなく留まり様もなくよろけて行った。

「あ、危ない！」

と、今度は岐部が飛び出して、吉本を掴んで引き摺るようにして手荷物車に揚げた。春子は涙だらけの光った顔を向けて、何か恐ろしい物でも見るようにこの有様を見ていた。吉本は再び閉めた戸の前に、人の群の中へもぐり落ちたようにぐたりと腰を下して、もう物も言わなかった。岐部は息をついで住川に言った。

「余つぽど呑んだのかい。吉本君にしては珍しいね」

「皆が余り呑まないのね。余った酒を、勿体ないと言ってがぶがぶやったんですよ。ビールコップで」

阿部が戻って来た。岐部は、

「どうした、見つけた？」

「居た、居た」

阿部がはいって戸を閉めるとベルが鳴った。

「さあ、春ちゃん。もう顔を拭きなさい」

「でも……信ちゃんいた？安子さんも乗った？」

「ああ、みんないた。乗ったよ。さ、あんたも少し窓から首を出しなさい」

春子は素直に窓から顔を出した。ベルが止んで汽車は動き出した。

「春ちゃん、ハンケチでも振りなさいよ」

春子はそんなことを言う阿部の気持がよく判って一心に顔を拭いた。阿部は笑いながら、

「日光よ、さよならって」

春子は阿部を振り返ってかすかに微笑した。汽車がホームを出ると少しゆれた。手荷物車の中の人々は叫び声を上げて波をうってよろめいた。

「子供がいる、子供が」

と岐部の後ろにいる老人が叫んだ。老夫婦で孫のような十二、三歳の女の児を二人の間に抱えていた。女の児は立ったまま正体もなく眠っていた。岐部は、老人が子供を抱いて手荷物車の床の凸凹に躓いてよろけているのを見て、

「僕の腰につかまって下さい。遠慮なく」

と言った。住川は人々の頭ごしに見廻して、

「皆さん、押しては不可ませんよ。我々、荷物はこわれ物です」

笑い声が起こった。

「貴重品、取扱注意、天地無用です。押しては不可ませんよ」

汽車の速力が出て来た。住川はよろけて、

「此の如くよろけ……おととと」

と戸を掴みそこなった手を人々の頭上で振り回した。笑い声と共に人々の間から、
「押しちゃあ不可ませんよ」

と言う声がした。住川はそちらへ向かって頭を下げた。住川の赤い顔には汗が出ていた。

「ああ、喉が渴いた。僕は水が呑みたいんだが、水筒を何処かへ忘れて来てしまった」

阿部が住川の背中を見て、

「あるじゃあないか、ここに」

「そうですか。それは、それは。すまんがこちらへ回して下さい」

「そら」

「やあ水筒よ、お前は何処へ行っていた。まだ水はあるかな」

と住川は耳元で水筒を振った。

「住川君、大丈夫かい。ほんとに水かい？」

「水ですよ。確かにあその水を入れたんですから」

「養老の滝と言うこともある」

「養老の滝？はて、そいつあ楽しみだ」

住川は水筒の水をぐくりとやって首を振った。

「うまい。いや、しかし、まぎれもなき水である。して見ると俺の親孝行も知れたものだ
な」

汽車は暗い野や川を火の子を散らしながら走った。雨は少なくなったがまだ止みはしなかった。住川は眼をつむったまま水筒の口をしめた。背の高い彼の姿は風に吹かれる椰子の木のようにゆれていた。しばらくすると窓際にいる阿部の肩を抑えて、

「そろそろ僕も危なくなつた」

「ええ？」

と振り返ろうとする阿部の背中へ、どさりと落ちて来た。

「おいおい。しつかりせいよ。……春ちゃん。すこし代わってこいつを窓際に出してくれ」

住川は窓際に来て、縁に寄りかかつて中を向いた。背の高い彼の頭は窓の上の縁につかえていた。彼はもう満足に開かない眼で春子を見下ろしながら、

「春ちゃん、僕の脇の下へ入れてやろうか。春ちゃんぐらい楽にはいれるよ」

「いやよ」

春子は素気なく言つて横をむいた。

「ああ、わしは春さんに嫌われた。しからば秋さんにしようか」

吉本はさつきから音もなかった。岐部は吉本の傍に立って、吉本が腰を下ろしたまま彼の脚に凭れるのにまかせて、時々吉本の襟元や耳の色をうかがつた。色はまだ蒼かった。

手首の脈を見るとほとんど判らないくらいの脈が打っていた。春子は掴まえどころがなく

よろけながら立っていたが、やがて阿部の背中に手をついた。窓に向つて斜めになつてい

る阿部の背中は丁度凭れよかつた。春子は無意識にそこに凭れ寄りかかつて眼をつむつた。

体中の疲れが泡立つように沸々と音を立てて湧いて来た。阿部は汽車の音に誘われたよう

に学生の頃の歌を小さな声で歌つた。その声が背中から春子の胸に伝わって、何か温かい

ものが流れ込んで来るように春子の疲れた心を柔らかく包んで、今迄の苦しさがだんだん

と忘れられて行つた。阿部は歌を止めて煙草をふかせた。春子は顔を挙げて、

「阿部さん、窓際について寒くない？お風邪ひいてるでしょう？」

「ああ、でも寒くない。春ちゃんがそうしてよっかかってくれているので、とても暖かいよ」

「まあ！」

春子は狼狽てて離れようとしたが、何だかそれもわざとは出来なくて、阿部のわきから阿部と住川の間の窓辺へ割り込んだ。三人共窓から首を出して、走って行く暗い夜の景色を眺めた。

「阿部さん、御免なさいね」

「ええ？何故さ」

「わたし、さつき、見つともない、泣いたりして」

「無理もないよ。春ちゃんぐらいの年ではね」

「だって……」

「気持が治れば結構だよ」

「御免なさい」

住川が顔をむけた。

「春さんよ。僕にもあやまって欲しいなあ」

「そうね。御免なさい」

「有難う。その一言は尊い」

「いやよ」

「叩けよ、然らば開かれん。ああ、われ希い請いてこの優しき言葉を得たり。ああ、春はよみがえれり」

今度は住川が大きいいい声で窓の外へ向かって歌いはじめ、走る闇はその声を千切るようにさらって行った。春子は住川の腋の下から岐部の方を振り返った。岐部は疲れたように黙っていたが春子の顔を見ると、足元の吉本を指しながら、

「僕は動けないんですよ。この先生が脚に寄り掛かっちゃってね」

と笑った。吉本はそのまま宇都宮まで身動きもせず、死んだように静かだった。

雨は再び激しくなまって宇都宮ではホームの上に白くはね返っていた。春子達は屋根のある方へ駆けて行った。みんな一度勢揃いしたが、今度はみな落着いているので人数を調べるのはわけなかった。上野行のホームは一杯の人だった。谷の一同は一番はずれに行って待っていて、運よく最後の新しく三両連結したのに乗ることが出来た。今度はみな塊って席がとれた。春子のよこには安子も滝子もすみ子もいた。隣には阿部や住川や岐部などがいた。吉本は向うの窓際に坐らされて、少し血の気を取り戻しながら口を開けて眠っていた。谷はみんな乗ったのを確かめると溜息をついて微笑った。前にいる阿部と新田に向って、

「どうも大変だったねえ」

「ええ」

「ずっと前からよく計画しておいたことが、こうなんだからね」

「ええ。他のみんなもそう言う風に計画していて、それが一ぺんにかち合っただけですね」

「うん……。これから春秋二季の楽しみは、近所の空き地を借りて運動会でもやるんだね」

阿部達も心から頷いた。

「酒も僕の家で呑めばいい。そうすればそんなに過ごさなくてもないだろう」

「全く、研究する余地がありますね」

春子は汽車が出ると、安堵と疲れで窓に頭をもたせて眼をつむっているうちにうとうと
した。その間に夢を見て、会社で伝票の束を片手にめぐりながら算盤をおいていたが、何
遍やっても合計が合わないので泣き出したくなっているところだった。春子は眼をさまし
て見回した。

「あら、わたし、眠ったのか知ら」

安子が振り向いた。

「ええ。：：草臥れたでしょう」

「疲れたわ」

「もう安心よ。疲れたらゆっくりお休みなさいな」

「ええ」

隣りでは岐部が白い紙を膝にのせ、阿部や住川や新田や谷まで近くに来てリュックサツ
クの上に腰をかけて加わり、てんでに白い小さい紙切れを持って考えていた。

「何しているの。あの人達」

「旅行を題にして俳句の運座をやっているの」

「ウンザって何？」

「みんなして作ったのを出し合うのよ、

「そう」

春子は眠るのに楽なように身体の位置を作って、阿部達を眺めた。酒を呑んで騒いだり
しても、その翌日には真面目によく働く人々だった。みんな温かく親切で、春子を可愛が
ってくれて、春子もまたみんな好きだった。阿部達は一心になって考えていたが、ことに

住川は上体を真っ直ぐにして大袈裟に眼をつむりながら汽車の動きにゆれていた。春子はそれを見ると可笑しくて堪らなくなつて、誰も居なかつたら、そつとその前に忍んで行つて、「わっ」と言つてやりたかつた。春子はもう一度居ずまいを直して、これからはほんつとにゆつくり休めると思つたととても楽しく、汽車の快い韻律的な振動に身を委せながら眼をつむつた。